

複数の患者を受け持つ総合実習 における看護学生の学び

別所 史恵・石橋 鮎美・坂根可奈子
平野 文子・三島三代子

概 要

平成21年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正をうけ、複数の患者を同時に受け持つ総合実習が、23年度に本学の教育課程においてはじめて実施された。研究に同意の得られた看護学生88名の実習終了後における自己評価表の学びに関する自由記載から、実習の学びを明らかにする目的で内容分析を行った。その結果374記録単位、46サブカテゴリーに分類され、【タイムマネジメント】【メンバーシップ】【優先順位】【チーム医療】【管理者業務】【倫理的判断】【個別的看護】【リスクマネジメント】の8つのカテゴリーにまとめられた。概ね実習目標にそった学びが抽出され、学生は多岐にわたる学びを得ていた。

キーワード：総合実習，看護学生，学び，内容分析，複数患者受け持ち

I. はじめに

平成21年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正をうけ、複数の患者を同時に受け持つ総合実習が、23年度に本学の教育課程においてはじめて実施された。

新卒看護職員の職場定着を困難にしている一要因として、「基礎教育終了時点の能力と看護現場で求める能力とのギャップ」があると考えられている。新卒看護職員の看護職になり仕事を続ける上で悩みとなったことは、1位が「配属部署の専門的な知識・技術が不足している(76.9%)」、2位が「医療事故を起こさないか不安である(69.4%)」、3位が「基本的な技術が身につけていない(67.1%)」であった。また、仕事をやめたいと思った理由の1位は「自分は看護職に向いていないのではないかと思う(21.6%)」であった(廣瀬, 2005)。看

護師養成施設や大学教育機関におけるほとんどの臨地実習では、学生一人に対して一人の患者を受け持ち看護の展開を行う学習形態をとっている(高橋, 2007)。そのため、新卒看護師は複数の患者を受け持つ看護業務の理解が不十分なまま就職し、看護技術にも自信が持てず不安の中で業務を行っている現状がうかがわれる。新卒看護師の早期離職の問題への対策としては、臨床においては“鍛える”から“慈しむ”教育へ、看護基礎教育においては臨床の場を体験できるプログラムの工夫が各教育機関や臨床の場独自の努力により進められてきた(後藤, 2007)。日本看護協会の調査では、2005年度の新卒看護師の離職率は全国平均9.3%であったが、2010年度8.1%となり減少してきていることが報告されている(日本看護協会広報部, 2012)。しかし、8.1%は決して少なくはない数字であり、また県別調査においては離職率が10%を超えている地域も多い。

この課題を解決するために、基礎教育終了時点の能力と看護現場で求める能力とのギャップを埋める取り組みの必要性から、2009年度実施のカリキュラムで新たに「統合分野」が新設され、「総合実習」が位置づけられた。

総合実習が新カリキュラムに位置づけられる以前から、臨床とのギャップを埋めるための複数患者を受け持つ実習（高橋，2007）や、総合実習後の学生の学びを分析した報告（漆坂，2009）などがあるが、報告件数や対象学生数が少なかった。総合実習は、実習最後の総仕上げであるとともに、学生が将来、臨地に出て働く自信につなぐための実習である。その実習の初年度である平成23年度の学生の学びを明らかにし、今後の課題検討・改善につなげたい。

Ⅱ. 研究目的

平成23年度総合実習における看護学生の学びの内容を明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象およびデータ収集方法

平成23年度A大学短期大学部看護学科（3年課程）で総合実習を受けた学生89名のうち研究に協力の得られた88名を対象とした。総合実習終了後に提出される自己評価表における「学び・感想」の自由記載欄（約7×17cm 余白）に書かれた記述内容をデータとした。

2. 分析方法

質的研究でBerelson,Bの内容分析手法を用いた（Berelson, 1952）。学生が記述している文章から、総合実習における学びと思われる部分を意味内容の類似性に基づき抽出し、コード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化し、学びの全体像を捉えるとともに、学びの記述の数からも、学生の学びの傾向を明らかにした。分析の質の保証においては、内容分析の主担当者のほかに共同研究者の合意を得た。

3. 倫理的配慮

本研究は、所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。看護学生の自己評価表を使用するため、研究と成績評価が影響ない

ことを考慮し、教員の成績評価終了後に評価表の研究的使用について、文書と口頭による説明を看護学生に対して行った。本研究への協力は、自由意思に基づき行われ、協力の有無により不利益を受けることがないこと、本研究の協力後でも、その都度質問があれば応じること、データは、研究目的以外には使用しないこと、記録やデータは、研究者間での分析時においても個人が特定できないように匿名化（コード化）して取り扱うこと、記録やデータは他者の目に触れたり人手に渡ったりすることがないように厳重に管理すること、データの確実な消去等を説明文書文中に明記し同意を得た。同意書は回収箱を設置して回収した。

Ⅳ. 総合実習の概要

1. 目的・目標

総合実習の目的・目標を表1に示す。

2. 総合実習の位置づけ

科目別実習は本学の教育課程の「看護専門教育領域」に位置する。「看護専門教育領域」は、多様化する社会の健康ニーズに対応できる実践能力を養うことを目的とし、「専門分野Ⅰ」「専門分野Ⅱ」「看護の統合分野」の3分野で構成されている（図1）。

「専門分野Ⅰ」はすべての看護に共通する看護学の基本的な内容を担う【基礎看護学】からなり、〈基礎看護実習Ⅰ〉（1年次後期1単位45時間）、〈基礎看護実習Ⅱ〉（2年次前期2単位90時間）を行う。

「専門分野Ⅱ」は人々のライフサイクルや心の健康に関連して生じる疾病や障がいに対応する【成人看護学】【老年看護学】【小児看護学】【母性看護学】【精神看護学】からなる。科目別実習は、前期・後期の通年科目であり、〈成人看護実習Ⅰ〉と〈老年看護実習Ⅱ〉は3単位135時間で、〈成人看護実習Ⅱ〉〈老年看護実習Ⅰ〉〈小児看護実習〉〈母性看護実習〉〈精神看護実習〉は2単位90時間で行う。

「看護の統合分野」は「専門分野Ⅰ」「専門分野Ⅱ」の学習を基盤にして統合・発展させる分野として位置づけられている。この「看護の統合分野」には様々な対象や健康レベルに対応し

表 1 総合実習の目的・目標

1. 実習目的
複数の患者を受け持ち、多重な課題に対応していく実践能力を養うとともに、医療安全、倫理的判断にもとづく主体的な行動、医療チームの一員としての連携・協働について学ぶ。
2. 実習目標
1) 複数の患者を受け持ち、優先度、時間配分を考慮して看護を展開する。 (1) 複数患者の情報を簡潔に把握できる。 (2) 看護上の問題と必要な看護を、速やかに判断できる。 (3) ケアの緊急度・重要度を判断し、優先順位を適切に決定できる (4) 複数患者に対するタイムスケジュールを、時間配分を考慮して作成・修正できる。 (5) (1)～(4)を統合して、必要なケアを責任をもって時間内に実施できる。
2) 対象の個性・安全性を考慮した看護援助を、倫理的判断をふまえて積極的に体験する。 (1) 安全管理において管理者の果たす役割を理解することができる。 (2) 患者に起こりうるリスクを予測し、そのリスクを最小限にしたケアや処置ができる。 (3) 患者の人権や平等性に配慮した看護援助ができる。 (4) 複数の患者との信頼関係を築くことができる。
3) チーム医療における他職種との連携・協働を学ぶとともに、看護チームの中でのメンバー、リーダーの役割と、メンバーシップについて理解する。 (1) 実習組織の看護提供体制(看護方式)を理解することができる。 (2) チーム医療における看護職の役割と他職種の役割を理解することができる。 (3) 適切な人に適切な内容の報告・連絡・相談ができる。 (4) リーダーおよびメンバーの役割を理解し、メンバーとしての責任をもった行動がとれる。

ていく【在宅看護学】があり、〈在宅看護実習〉を2単位90時間行う。

総合実習はこれらのすべての科目別実習が終了し、より臨地に近い形で看護を学ぶ【看護の統合と実践】に位置付けられ、3年次12月ごろに2単位90時間で行うこととしている。

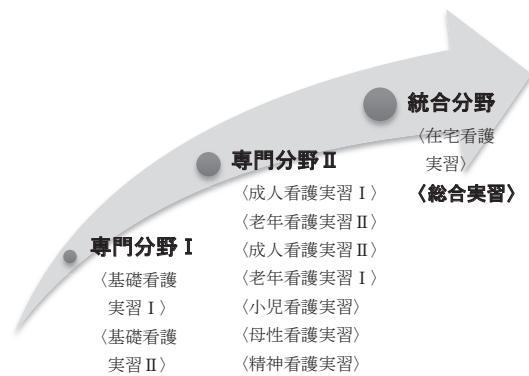


図 1 科目別実習と総合実習の位置づけ

3. 方 法

3年課程のカリキュラムで、すべての科目別実習が終了した看護学生に対して平成23年12月に2単位(90時間)の総合実習として実施した。

1病棟あたり、2～6名の学生を配置し、3施設病院、25病棟にて総合実習をおこなった。

学生は同時に2名以上の患者を受け持った。実習は日勤の1勤務帯で、水曜日を除く2週間(8日間)で行われた。1週目は複数受け持ち患者の情報収集を行いながら、病棟看護師の追跡実習をとおして1日の日勤の業務やメンバーシップについて学んだ。また病棟管理者のオリエンテーション後、半日程度の管理者追跡実習を行い、安全管理やマネジメントについて学んだ。翌2週目をめどに、患者へのケアが主体的になるよう取り組み、夜勤看護師への申し送りを力量に応じて実施した。グループでの学びの共有のために実習4日目に中間カンファレンスを1時間程度、実習最終日に最終カンファレンスを1時間半程度設けた。患者を複数受け持つため、「タイムスケジュール」を作成し実施した。また、スタッフの一員として、病棟のカンファレンスや病棟業務にも積極的に参加した。

V. 結 果

88名の記述から総合実習の学びを表す374記録単位が抽出され、46のサブカテゴリーと8のカテゴリーに分類された(表2)。

文中ではカテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉、具体的な記述を「 」で表す。

表2 総合実習による看護学生の学びの内容

n=374

カテゴリー	記録単位数	(%)	サブカテゴリー	記録単位数
タイムマネジメント	112	29.95%	短時間での簡潔な情報収集	23
			ケアの時間配分や調整の仕方	20
			十分なアセスメントと事前準備によるケアの時間短縮	19
			柔軟にスケジュール変更に対応する	16
			素早い判断力	6
			先を予測したケア	6
			患者の状態や生活リズムからケアの時間帯を考慮する	5
			動線を少なくした効率のよいケア	5
			焦らず落ち着いた態度でケアを実施	3
			ゆとりのある時間帯の確保	3
			常に受け持ち他患者にもアンテナを張っておく	2
			ケアに集中しすぎない	2
ケアの段取りを把握しておく	2			
メンバーシップ	79	21.12%	報告・連絡・相談による連携	15
			自分の力量やできないことを把握してケアを他者に依頼する	14
			情報の共有による連携とケアの統一	11
			メンバーの一員としての役割の自覚	10
			適切・簡潔な報告	8
			責任感を実感	7
			情報の共有・連携がよりよい看護の提供につながる	7
			他のスタッフの動きを把握しておく	4
日頃のコミュニケーションによる働きやすい職場作り	3			
優先順位	41	10.96%	優先順位と判断方法	31
			決められた時間のケアや治療を優先してスケジュールを立てる	8
			ケアの根拠を明確にした優先順位の決定	2
チーム医療	40	10.70%	チームで補完しながら看護を行う	20
			チームで行う安全管理	5
			看護方式・看護体制の理解	2
			他職種との情報の共有と伝達によるケアの統一	9
			他職種との連携がよりよい看護の提供につながる	4
管理者業務	33	8.82%	管理者の役割と業務の理解	11
			働きやすい職場の風土作り	8
			安全安心な療養環境管理	6
			スタッフからの報告を受け連携をとる	3
			管理者も直接患者と接する時間を大切にしている	3
			管理者として他職種との連携をとる	2
倫理的判断	32	8.56%	限られた時間のなかでの信頼関係作り	13
			複数患者を受け持つことでのケアの平等性	11
			声かけ・配慮の重要性	4
			効果的なコミュニケーション方法	4
個別的看護	20	5.35%	限られた時間の中でも個性のあるケアを考える	11
			患者主体の看護	6
			病態や状況を把握してケアを実施する	3
リスクマネジメント	17	4.55%	リスク感性と患者の安全を守ることが重要	10
			複数受け持つことでリスクが高まる	5
			情報を整理する	2

1. 【タイムマネジメント】

【タイムマネジメント】に関する記述は112記録単位（29.95%）あり、最も多い学びであった。

学生は日頃の実習では時間を十分に使った情報収集をしている。そのため「情報をただ取るのではなく、何を知りたいのかを自分の中で決めて収集していくことで効率的に情報収集を行

える」「1回の訪室で色々なことに目を向けて観察し、多くの情報を得ることも効率の良さにつながる」と複数患者を受け持つことにより時間が限られていることによる〈短時間での簡潔な情報収集〉の必要性を特に痛感していた。また、「患者ごとにケアの所要時間や見守りの必要性のアセスメントや判断をしなければならない」とケアの所要時間を考えながら、「スケ

ジュール調整は、朝病棟に来たときや昼休憩後に2人の患者の所へ訪室し、状態の把握をして優先度の判断を行うことが大切」と〈ケアの時間配分や調整の仕方〉を学んでいた。さらに「必要なケアを責任持って時間内に実施するためには、朝、患者のケアに必要な情報をきちんと収集し、その日の観察項目、必要なケア、関わりの注意点を把握してからケアに取り組む」といった〈十分なアセスメントと事前準備によるケアの時間短縮〉が必要であると考えていた。しかし、十分準備をしていてもスケジュールの予定にないケアや検査などが緊急に入ることもある。そのため「頭の中で咄嗟にスケジュールの変更をし、臨機応変に対応しなければいけない」と〈柔軟にスケジュール変更に対応する〉行動力と〈素早い判断力〉が求められることを学んでいた。学生は時間通りにケアが進まないことや予定外のケアへの対応に困ることが多いため、「時間に余裕ができるように手際の良いケアと予測した行動することを心がける」ように努力し、〈先を予測したケア〉を考えるようになった。また、どんなに忙しくても、ケアの時間の調整は学生の都合ではなく、あくまでも〈患者の状態や生活リズムからケアの時間帯を考慮する〉ことを心がけていた。また、無駄な時間を少しでも省くために、「個々の用事での頻回な訪室を避け、他のケアと合わせて訪室」したり、「少しの空き時間でも有効に使い薬の確認や配薬に行くなど無駄なく動く」など、〈動線を少なくした効率のよいケア〉を考えていた。また、「自分が焦るとそれが表情等に出てしまい、患者に余計な負担や不安な思いを与えてしまう」「忙しくて焦ってしまうが、焦らず薬などは特に注意をして確認しなければいけない」など忙しいときほど〈焦らず落ち着いた態度でケアを実施〉することの大切さを学んでいた。そして「様々な処置が突然入ってくるため、修正したケアをおこなえる時間をみつめておくことも技量」であるため、〈ゆとりのある時間帯の確保〉をしておく必要性を感じていた。そして〈常に受け持ち他患者にもアンテナを張っておく〉ことで、「患者の小さな変化でも気づけ、複数患者を受け持つ中でも、細やかな配慮のできる看護師でいられる」と感じ、〈ケアに集中

しすぎない〉ようにして「他の受け持ち患者とのコミュニケーションをする時間」をとりたいと感じていた。そして看護師がスムーズにケアをしているのは「1日の流れや必要なケアをきちんと頭に入れている」と感じ〈ケアの段取りを把握しておく〉ことの必要性を学んでいた。このように学生は限られた時間をどのように有効に使うかという時間のやりくりである【タイムマネジメント】についての学びを多く得ていた。

2. 【メンバーシップ】

次に学生の学びが多かったのは【メンバーシップ】に関する記述で79記録単位(21.12%)であった。

学生は日勤の一勤務帯の実習を通して、「日によって担当看護師が変わるので、一貫した看護が大切」であり、学生も1人のスタッフとして〈報告・連絡・相談による連携〉を怠らないよう気をつけることができていた。また、学生は「ケアをすべて自分で行わなければならないと思っていた」が、「ケアが重なりできないこともあり、他の人に頼むということも必要」であると分かったと述べており、〈自分の力量やできないことを把握してケアを他者に依頼する〉ことを学んでいた。さらに夜勤帯から日勤、日勤から準夜勤への申し送りを見て、「観察項目、注意する点などチームで共有して動き、1日1日がひきつながれているのだと感じた」「メンバーの一員としての情報を共有ことの重要性、カンファレンスの意義を理解することができた」と述べていた。つまり〈情報の共有による連携とケアの統一〉が看護師スタッフ一丸となって行われていることを学んでいた。総合実習における学生は、病棟スタッフに受け入れられ、「病棟の一員として自覚を持って患者と関わったり、スタッフと連携すること」ができ、〈メンバーの一員としての役割を自覚〉することができていた。また、学生は準夜勤への申し送りを体験し、伝えることの難しさを実感した。その他、転棟時の他病棟への申し送りを見学したり、担当看護師に自分のケアや意思を伝えたりするなかで、「日中の変化や観察項目を‘簡潔’に伝える必要がある」と〈適切・簡潔な報告〉

について学んでいた。そして「複数患者を受け持つからといって、個々のケアや観察を疎かにせず、責任を持って最後まで行うことが大切」であると述べている。複数患者を受け持つことやメンバーの一員として一勤務帯のケアを行う中で、学生は看護師としての強い〈責任感を実感〉することができていた。さらに、組織的に取り組む看護の質について考えを深めていた学生もいた。「組織で患者を看ていることを忘れず、仲間と助けあったり情報交換をしたり考えを深め合うことで良質な看護が提供できる」など〈情報の共有・連携がよりよい看護の提供につながる〉ことを学んでいた。学生は複数患者を受け持つことで、「今まで自分の受け持ち患者しか見えていなかったことに改めて気づかされた」と述べた上で「自分の受け持ち患者だけでなく同じ病室や病棟の患者、また看護師や他のスタッフの動向にも目を向けられるようになった」と〈他のスタッフの動きを把握しておく〉という広い視野が必要なことも学んでいた。さらに看護師には「協力関係が重要であり、日ごろからスタッフ同士であいさつなどのコミュニケーションをとっていかなければ業務は出来ない」と学生は感じ、〈日頃のコミュニケーションによる働きやすい職場作り〉も重要な看護の質の要素であると学んでいた。以上のように、メンバーの一員としての責任や自覚のある行動をとるという【メンバーシップ】についての学びが深められていた。

3. 【優先順位】

【優先順位】に関する学びは41記録単位(10.96%)であった。

学生は複数受け持ち患者を持っていることから、だれのどのケアを優先するのかという【優先順位】について学んでいた。複数患者を受け持っているので、「常に優先順位を考えて行動していた」あるいは「今でないとはだめであるのか、自分でないといけないケアかを考え、判断する」など〈優先順位と判断方法〉について考えることができた。さらに優先順位決定のコツとして、その時間に確実に投与しなければならない薬に関するケアなど、〈決められた時間のケアや治療を優先してスケジュールを立てる〉というこ

と、さらに、なぜそのケアを優先するのかという理由もいえるよう「ケアの根拠を自分自身で理解する」ことが大切で、〈ケアの根拠を明確にした優先順位の決定〉ができる判断力が必要であると学んでいた。

4. 【チーム医療】

【チーム医療】に関する学びは、40記録単位(10.70%)みられた。このカテゴリーは先のメンバーシップよりさらに組織の一員として医療に対する学びを深めたカテゴリーとして【チーム医療】を位置づけた。

〈チームで補完しながら看護を行う〉では「看護師一人では行き届かない点を、チーム動いて補っている」ことや「管理者、チーム、一人一人の信頼関係や協力で病棟全体の看護ができる」「いつも周りには一緒に協力してアセスメントしていくスタッフがおり、チーム全体で看護していく重要さを学んだ。自分対患者ではなく、チーム対患者であると強く感じた」などを学んでいた。さらに「リスクが高い人ほど病棟全体で見えていく」など〈チームで行う安全管理〉があることを学ぶことができていた。そしてチーム医療は、組織のなかでどのような看護体制なのかといった〈看護方式・看護体制の理解〉を学んでいた。また、「1人の患者の生活を支援するためにたくさんの職種が関わり、1つのチームで動いている」ということを体験的に理解し、「他職種同士でも情報を交換しあい、患者がより安全安楽に過ごせるよう統一したケアを提供し、チームで全面的に患者を捉えていくことが大切」と〈他職種との情報の共有と伝達によるケアの統一〉の重要性を学んでいた。さらにそれらの〈他職種との連携がよりよい看護の提供につながる〉ののだということを感じていた。学生は看護が一人でできるものではないこと、さらに看護師だけでもよりよい看護は提供できないことから他職種協同による【チーム医療】の重要性を学んでいた。

5. 【管理者業務】

【管理者業務】についての学びは、33記録単位(8.82%)みられた。

学生は、病棟の管理者からの説明や業務を同

行・見学させていただく中で、【管理者業務】についても多くの学びを得ていた。学生は病棟管理者が「ベッドコントロール」「患者のクレームの処理」「会議の出席などを考えながらの勤務の決定」「スタッフのワークライフバランス」「物品管理」など多くの〈管理者の役割と業務の理解〉をしていた。多忙な業務内容とともに特にスタッフが〈働きやすい職場の風土作り〉に力を入れていることに感心し、環境が看護の質に影響することを学んでいた。また、病棟管理者は、その病棟の患者にとって〈安全安心な療養環境〉を整えて管理を行う責任者であることを理解することができた。患者の療養生活の調整のためには多忙ながらも〈管理者も直接患者と接する時間を大切にしている〉ことに学生は感動していた。そして、病棟管理は看護師長が一人で行っているわけではなく、〈スタッフからの報告を受け連携〉をとったり、様々な部署と連携をとったりしながら〈管理者として他職種との連携〉をおこなっていることを理解することができていった。学生は管理者が広い視点で病棟での患者の生活の安全や、スタッフの健康管理を行っているということ学んでいた。

6. 【倫理的判断】

【倫理的判断】に関する学びは、32 記録単位 (8.56%) みられた。

「今までは頻回な訪室、たくさんの会話が対象者理解や信頼関係の構築につながると思っていたが、今回の実習で患者がその時々でどんな気持ちで過ごしておられるのかを考え、気持ちによりそっていく事が一番大切であるのだと実感した」と多くの学生が述べるように〈限られた時間のなかでの信頼関係作り〉に学生は苦慮していた。そして「ケアが多い患者に時間をかけがちであったが、個々のケアをその患者に合わせて提供し、患者の訴えを聞いて答え、どの患者にも同じように「誠実」に関わることが大切だと思うようになった。関わる時間は平等に出来ないが、複数の患者への看護の丁寧さなどが、患者が納得するような平等な看護につながると思った」など、〈複数患者を受け持つことでのケアの平等性〉についての学びが深められ

ていた。そしてケアにかかる時間が異なるからこそ、〈声かけ・配慮の重要性〉に気づくことができていた。それまでの科目別実習では、学生はじっくりベッドサイドに座って話をするというコミュニケーションの取り方が主であったが、今回の総合実習には十分な時間はなかった。そのため、限られた時間の中で信頼関係を築くために、ケアを行いながら会話をしたりするなどコミュニケーションの工夫する必要が生じ、〈効果的なコミュニケーション方法〉について模索する姿が見られた。以上のように、限られた時間・関わりの中で、看護の平等性とは何かを考えながら、いかに誠実に患者と信頼関係を築いていくかという【倫理的判断】について学んでいた。

7. 【個別的看護】

【個別的看護】に関する学びは 20 記録単位 (5.35%) みられた。

学生は、個別的な看護への意識は「複数受け持ちとなっても変わらない看護」であると実感していた。また、「ケアに追われても患者への心理的ケアを忘れたくない」「心地よいケアができるようになりたい」「複数受け持つ中での個別的な関わりが大事」など、ケアに追われて時間がないからこそ、〈限られた時間の中でも個別性のあるケアを考える〉必要性を学んでいた。そして行わなければならないケアがたくさんあっても「ケアの計画を立てるときに自分本位ではなく患者中心の計画立案を心がけなければいけない」と〈患者主体の看護〉の重要性を学んでいた。そして、複数の患者の情報を簡潔に把握したり、その人に必要なケアを行ったりするためには、「病態や治療に関する基礎知識がとても重要」であることを改めて感じており、〈病態や状況を把握してケアを実施する〉、つまりきちんと分かってケアをすることが重要であると学んだ。以上のように、複数受け持ちながら少ない関わりの中でもその患者が望む、患者の価値観や生活背景を重視した【個別的な看護】を大事にしたいという看護学生の素直さが感じられた。

8. 【リスクマネジメント】

【リスクマネジメント】に関する学びは17記録単位(4.55%)みられた。

学生は科目別実習では一人の患者を受け持っていたため、常に目や気が配れる範囲にすることができた。しかし、総合実習では複数の患者を受け持つため、十分訪室できないことによる不安が強い。学生は「患者に起こりうるリスクを予測し、考えて対処ができるようにしていきたい。そうすることで、患者・家族と看護者の安全を確保することにつながる」「常に“安全”を意識して患者と関わる大切さを改めて感じた。部屋に訪室した際、患者が安全に過ごすことができるのかを観察したり、計画修正の際も患者の安全を守れるのかも含めて考えなければならぬ」など、〈リスク感性と患者の安全を守ることが重要〉であるということを学んでいた。複数患者を受け持つことの具体的なリスクの内容としては、「輸液や与薬など複数の患者を持っているので確認が重要」「複数の患者を受け持つ中で院内感染を防止するための清潔操作」「患者の誤認を防止するための確認」などがあがり、〈複数受け持つことでリスクが高まる〉ということを学んでいた。また、複数患者を受け持つことで、情報が混乱してどちらがどちらの患者情報が分からなくなった学生もあり、〈情報を整理する〉ことも事故予防のために重要であることが分かった。以上のように、複数受け持つことならでの、事故や危険の予防である【リスクマネジメント】について学ぶことができていた。

Ⅵ. 考 察

今回、初めての総合実習を展開し、行った学生の評価内容から、学生の学びの内容を明らかにした。最終的にカテゴリーとしてまとめられた【タイムマネジメント】【メンバーシップ】【優先順位】【チーム医療】【管理者業務】【倫理的判断】【個別的看護】【リスクマネジメント】の8項目をみると、概ねすべての実習目標にそった学びが抽出されており、総合実習の成果があったと考えられる。

しかし、学びの内容を照らし合わせてみると、

表1の目標の3)の(4)「リーダーおよびメンバーの役割を理解し、メンバーとしての責任をもった行動がとれる」の「リーダーの役割」に関する理解や学びは全く抽出されなかった。総合実習を行った3施設ともに、固定チームナーシングで継続受け持ち看護方式の看護体制を取っていた。学生はその日の担当看護師と行動を共にすることが多く、総合実習の方法論として、特にリーダー業務を追跡見学させる方法を行わなかったため、理解しにくかったのではないかと考えられる。今後は、チームの一員としてのメンバーシップを取りながら、リーダーの業務にも関心が寄せられるような支援が必要であると考えられる。

特に学生の学びで最も多かったのは「タイムマネジメント」の112記録単位(29.95%)であった。タイムマネジメントにおける学生にとっての目標は、日勤帯における受け持ち患者へのケアを、責任を持って実施し時間内に終了することである。学生はそれまでの科目別実習では一人の受け持ち患者の情報収集・アセスメントに時間を費やし、計画立案実施に至るまでは1～1.5週間の日数を要している。学生は全ての情報を電子カルテから読んだり書き留めたりしてからでないと情報を整理・解釈できないため、時間を要しているのではないと思われる。今回学生には、複数の患者を受け持つことで、それまでの科目別実習でのやり方ではなく、いかに早く複数の患者の情報を収集できるか、また、日々の患者の状態の変化に対応できるかが要求された。今回の総合実習における情報収集は学生にとっては困難なことであったと思われるが、その違いから学びとして実感し、この「タイムマネジメント」に関する学びの記述につながったと考えられる。今後は臨床とギャップを埋めるための実習であるので、情報収集のコツや視点を指導者や教員が指導していくことも必要である。しかし、総合実習で初めて複数患者や短時間での情報収集の仕方を学ぶのではなく、科目別実習時から意図的な情報収集の仕方、また、科目別実習に出るまでの講義においても看護過程の演習やシミュレーション教育の演習などからも、どのように情報を収集すればよいのかトレーニングの積み重ねが必要と考える。

「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」では、可能な限り夜間実習を行うと示されている。今回、我々は夜間実習を内容に含まなかった。しかし、日勤の一勤務帯を実習時間とすることで、準夜勤への申し送りや深夜勤務からの申し送りを聞くなどの体験から、学生はチームで連携しながら24時間患者をケアしていることや情報の共有の重要性など多くのことを学ぶことができていたと考えられた。ただ、夜間の患者の状況の変化を直に体験することを今後目的とするならば、実習内容・方法を検討して行く必要がある。

今回、46のサブカテゴリーに学びがまとめられたが、非常に多岐にわたるものであった。患者との関わりや実習を通しての体験は、学生に関わる者が意図的な関わってこそ深化し、意識化される。つまりどんなにすばらしい経験を学生がしていたとしても、意味づけする教授活動を加えない限り、現象や経験の意味を深く理解することは困難であり、経験した事実が解釈されないままになる危険性があるといわれている(齊藤, 2009)。〈動線を少なくした効率のよいケア〉〈決められた時間のケアや治療を優先してスケジュールを立てる〉など、多くのサブカテゴリーは臨床の現場の看護師とともに行動し、体験と直接的な助言があってこそその学びではないかと考えられる。学生の記述にも「看護師さんが『どうしたら動線を少なくできるか必要物品の過不足がないようにしているよ』と教えてくれた」「それぞれの看護師さんが『注射の時間など必ず守らなければならないケアを優先させている』など自分なりのスケジュール管理のコツを教えてくれた」などがみられ、学生に関わる教員、指導者、管理者はもとより、総合実習中一番身近で学生を指導していた看護師スタッフの学生への発問、助言、関わりが、学生の中で多くの学びとして蓄積され、これらの学びが得られたのではないかと考えられる。今後も大学と臨床側が協働して学生の学びが深まるよう連携を密にしていく必要がある。

Ⅶ. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、さまざまな総合実習の方法がある

なかでの一部の大学における学びの分析であり、一般化できる知見ではない。しかし、通常の実習より、より臨床に近い総合実習をとおして、学生が広い視野を持ち多くの学びを得ていることが明らかとなった。今後も学びの評価を継続し、より効果的な方法論を臨床とともに作り上げることが課題といえる。

Ⅷ. 結 論

1. 総合実習による学生の学びとして374記録単位が抽出された。さらに46サブカテゴリーに分類され、【タイムマネジメント】【メンバーシップ】【優先順位】【チーム医療】【管理者業務】【倫理的判断】【個別の看護】【リスクマネジメント】の8のカテゴリーにまとめられた。
2. 概ねすべての実習目標にそった学びが抽出されており成果があったと考えられる。しかし、「リーダーの役割」に関する理解や学びは抽出されなかった。
3. 多岐にわたる46のサブカテゴリーは臨床の現場の看護師とともに行動・体験し、十分な看護師からの意味づけの働きかけによって深化された結果と考えられる。

文 献

- Berelson, B (1952): Content Analysis, in Lindzey, G., Aronson, E., Addison-Wesley publishing Company, Inc/ 稲葉三千男, 金圭煥 (1957): 内容分析, 1-79, みすず書房, 東京.
- 後藤桂子・松谷美和子 (2007): 新人看護師の看護実践を段階的に進める「総合実習」, 看護展望, 32 (7), 31-38.
- 廣瀬千也子 (2005): 「新卒看護職員の卒後研修の制度化推進」についての取組 - 職能団体の立場から, 厚生労働省「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会」報告書, 日本看護協会出版会編, 日本看護協会出版会, 107-114.
- 公益社団法人日本看護協会広報部 (2012): 2011年病院看護実態調査結果速報, News

Release, 1-14, 最終閲覧 2012-10-1,
www.nurse.or.jp/up_pdf/20120806122153_
f.pdf

齊藤茂子 (2009) : 新カリキュラムで臨地実習
をどう見直すか, 看護展望, 34 (2), 6-18.

高橋秀子, 松岡清子, 梶喜子他 (2007) : 複数
受け持ち制実習から総合実習への展開, 看
護展望, 32 (7), 23-30.

漆坂真弓, 木村紀美, 村田千代他 (2009) : 成
人 (基礎) 看護領域における看護総合臨床
実習の学びと課題 - レポートの分析を通し
て -, 弘前学院大学看護紀要, 4, 23-35.

Nursing Students' Learning in Comprehensive Nursing Practicum Responsible for More Than One Patient

Fumie BESSHO, Ayumi ISHIBASHI, Kanako SAKANE,
Fumiko HIRANO and Miyoko MISHIMA

Key Words and Phrases :

Comprehensive nursing practicum,
Nursing student,
Learning,
Content analysis
Responsible for more than one patient